
こんな俺にしかできないこと

阿蘇峰 大河

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

こんな俺にしかできないこと

【Nコード】

N2316BA

【作者名】

阿蘇峰 大河

【あらすじ】

ちよつと以上にシリアスな展開から始まる。ストーリー。

主人公、橘たちはなかあ薫は自分の下らない一言で親友の存在を否定し、転校まで追いやった。

そして彼は誰かと接するのが怖くなった、自分がまた誰かを傷付けてしまうのではないかと。そうして彼は誰かと関わるのをやめた。そんなある時、傷付けてしまった幼馴染が自分のいる高校に転校してきて!?

そんな、人助けしか人と接することのできない主人公の幼馴染と

の再会から始まる恋愛の物語。

1話（前書き）

いままでの自分とは180度変えてみた、現、状況からの初作品です。

1話

『座右の銘』

意味 座右の銘とは、行動の戒めとするために日常的に心に留めておくための言葉。『文選』に収められた後漢の崔？（崔子玉）による文章「座右銘」に由来する。

W i k i p e d i a ・ 参 考

誰かが俺を一言で言い表すなら、『人間不信』

人を傷つけるのが異常なまでに怖い、そんなだめな奴だ。

4年前、中一の時の事だ。

幼稚園からの幼馴染の親友を自分のふざけたたった一言で、存在を否定し、転校まで追いやった。

もしもあの頃に戻れるのなら、今やり直せるなら、全力であいつのこゝろを受け入れたい。

こんな駄目やろうな俺でも。

1話（後書き）

更新が遅いですが気長に待って下さると嬉しいです。

2話（前書き）

最低週一は投稿したいです。

2話

4月、それは出会いと別れと季節。

桜舞い散る桜並木を歩きながら俺、橘薫は釈然としない気持ちで
高校生活2年目を迎えようとしていた。

ただ進学したのはたった一つの理由からである。

過去に精神的傷を負わせてしまったあいつを見つけて今度こそ許
されるのなら誤って受け入れたいとゆურიゆうだ。

入学式は普通に過ぎ、皆各教室に向かった。

2・Cそれが俺の新しい教室だった。

担任は松本先生だった。

「んじゃ、これから1年間よろしく。まず自己紹介から始めようか」
自己紹介は出席番号順に進んでいき俺の番が来ると、

「出席番号9番、橘薫だ。あまり声をかけないでくれ、以上だ」
周囲からはザワザワとなにやらいわれるが俺の気にしたことでは
い。

明るい空を小鳥が飛んでいき、高校生活2年目が始まった。

授業は午前で終了。

街中を通りながら自宅に向かう。

「あの、ちよつといいかい？」
いかにも想定年齢80を超えているだろうおばあさんに声をかけ
られた。

「ここら辺の清水とゆう家がわかるかい？」

けど」

「おかげさまで平気です」

「ならいいな、じゃあな」

向こうにおいてきたカバンを取りに行こうと立ち上がるが、かなり強引に足をすったようだ。

血が流れているが平気だろこんくらい、痛いが。

「あ、の名前を教えてくださいませんか私はしm」別に名のれるほどいいやつじゃねえんだ、じゃあな」あの、ちょっと」

足の痛みをこらえながらカバンを拾い、家に向かう。

3話

自宅の自分の部屋に入ると、本棚、机、ベット、タンスと飾り気のない普通の部屋が見えてくる。

さつさと宿題を終わらせて、店の手伝いしないと。

自分の家：もとい橘家は俺が中二の夏に引き取られた、親戚だ。

幼馴染との関係が崩れ、立て続けに両親の交通事故での死亡。

そんな中引き取ってくれたのが、この家だ。

この家は中々繁盛しているとはいえないが喫茶店をやっている。

今の母親、楓さんにこんな見た目だとちょっと柄が悪いと言われメガネを強制的にコンタクトにされ髪をワックスで髪を所どころに立たされた。

未だに誰一人として一言もかけられない、と言つかほとんど厨房だっったりする。

最近やけに女性客が多くなっている気がする。

別にどうでも。

翌日。

朝は自主的に起き、当番せいで朝食を作る。

朝食ができると皆を起こす。

父、母、義理の妹の3人を。

「齋さん楓さん起きてください」

「はい、はい」

父、齋さんはおもちゃ会社の社長でこの家はこの人のおかげで潤っている。

母、楓さんはアラフォーを過ぎているが見た目が20台にしか見

えない。本人曰く努力しただいだそうだ。

義理の妹と言っても俺の誕生日が2ヶ月早いだけ何だが、まあ起こしにいく。

「お〜い。要起きろー」

部屋の外から呼んでも反応がない、

部屋を開けてはいるとベットでこちらに背を向けて寝ていた。

揺らして起こそうとすると、

「おはよ〜 かおる〜」

と毎回起こすたびに抱きついてくる。

とある一件後からずっとこの状況だ。

こいつの名前は要、若干ブラコンがはいっている。

要が抱きつきと二つの確かな膨らみのある双胸が当たるがもう慣れた。

「放してくれないか、朝ご飯が冷める」

無理やり引き離そうとすると足に痛みがくる。

「薫の反応が薄い〜」

要は、ズルズルと引き下がった。

ついでにゆくと、学校ではありえないほど凜っとしている。

さらについでに言うつと校内ではトップ3にはいる美少女。どちらかと言うと可愛いより綺麗があっている。

同一人物とは思えない。

こつ何年も一緒に過ごしているから自然に話せるが、クラスメートと話すのは慣れない。

一階に下りて皆で朝食を食べる。

「昨日、街中で女の子が車に轢かれそうになって奇跡的に救い出した白星の学生がいたそうだ」

「そうなの？」

「ああ、職場の社員から聞いた。なんとも勇敢な学生だ」

俺と要の通う高校のなまえが白星学園、県内屈指の名門校。

ただ家が近いからとゆう理由とあいつを探すために受けた高校だ。

要の学力だったらもつと上の高校にいけるはずなのに薫がいるし近いからとゆう理由で受けたそうだ。

食べ終わると斎さんは出勤、薫は上で着替え中。

「楓さん、大きい目のガーゼってあります？」

「どうしたの？」

「ちよつと昨日足すつて血が出て、替えのがないかな？」

「見せてみなさい」

右足の裾を上げると、血の色でガーゼが染まっていた。

「あらあら、ちよつとまっつてなさい、ってどうしてこうなったの」

「さつき、斎さんが言っつてたじゃないですか、街中でつて助ける際に思いつきりすりました」

「薫くんまた無茶したのね」

「まあ」

楓さんは、救急箱を取りと出し流れるような手さばきでガーゼを替えていく。

「はい、終了。無茶は少し控えなさい」

「できるようがんばつて見ます、それと・・・」

「よろしい。それと？」

「その際にメガネを無くしてしまい、使い捨つてのコンタクトも切れたのでちよつと買つて来たいのですが」

「それなら学校に連絡しとくわね、ちゃんと午後からは授業出るのよ」

「了解です」

午後。

何とかメガネとコンタクトは買えたのでよしとする。

だが午後の授業の最初の授業はちよつと後半からになりそうだ。

授業中のタイミングを見計らい、

「すみません、遅れました」

「橘か、早く席に着けよ」

「はい」

と普通に入れた。

普通に授業は進んだ。

授業が終わり、次の授業の準備をしようとする、手紙が入っていた。

？なんだ。果し状とかの部類だろう。

今まで過去計23回ほど喧嘩吹っかけられて全員返り討ちにした事がある。

そのせいで不良たちの中では有名になっちまった。

おかげで誰も声をかけないし、何事もなく学園生活がおくれる。

この学園は何気にレベルの高い高校だから不良なんぞは限りなく少ない。

そう少ない。いるにはいる。3年にトップと部下3名。地元で有名な輩だ。

気になって開けると、

『橘様、今日放課後屋上でお待ちしております』

やっぱり果し状か。やけに言葉遣いが丁寧だな。

まあ、倒せるだろうから行くけど。

放課後、屋上のドアを開けるとフェンス際で女子1人男子3名とゆう感じで襲われていた。

「や、やめてください！」

「いいじゃねえか、こんな上玉滅多にチャンスがねえんだ」

彼女の服は所々破けていた。もといカッターなどで切られたと思われる。

前にいる男子の手にはカッターナイフが。

「ちょっといいですか？」

「ああんっ！誰だてめえ、俺らのお楽しみタイムをじゃますんじやねえ！テメエらやつちまえ！」

カッター持つている奴がおそらく頭。

残りを仮にA、B、Cとしよう

「覚悟しろよ、下級生、今なら素直に立ち去るだけで見逃してやるよ」

「そうそう、俺らはレッドDの直属の支配下の中で2番目に強い勢力なんだぜ」

何だよその無駄すぎる設定。

何かもしかしてこの後俺は不良たちを倒しながら強くなる新感覚ストーリーが始まるんですか。

「それは拒否させていただきます、三年の先輩方？」

「もうやつちまおうぜ」

A B Cは3方向に俺を囲んでカッター、釘バット、メリケン、を持ち、襲い掛かってくる。

俺、一人で何にも持ってないんですよ？酷くないっすか？

まあ、今まで素手で不良どもを累計80人は倒したかな？

「オウツラッ」

と軽い感じで釘バットを大きく振りかぶってきた。

懐ががら空きじゃん。

鳩尾に全力では辛いので（足が痛いからしっかり踏み込めない）

8割程度で殴ると振りかぶった上体で後ろに倒れた。

「一人目、次は？」

「何だこいつ、強ええ」

「ちっ、俺がこんな奴一発でしっ……」

長くてうざっいたらしいので、殴った。顔面をさつきと同じくらいで。

「二人目」

「せめて最後まで言わせてやれよ！」

カッターをこちらに刃を向けて突進してくる。
まっすぐ突っ込んでくるので余裕でかわせる。

そのまんま横に交わしてCを横から蹴る。

イテエ、蹴りなんて使うんじゃないか。

「ボスさん、不良キラーって知ってるかい？」

「あ、あメガネを掛けた地味な不良キラー、それがお前だって言うのか！」

「ご名答」

「なっ！チツ、これ以上動くな！こいつがどうなってもいいのか！」

「別に動きませんよ、代わりに来る人がいるんで」

屋上のドアのほうに指を向けると、

「コウラア、貴様何をやっておるかあ」

生活指導の先生がやってくる。

こんなパターンに近い状況に陥った事があるので予め打って置いた。

果し状が渡されなかったらこんなことはできなかつたな。

「あ、あの橘くんであってるよね？えっと私は清水綾、また助けてもらっちゃったね」

「たしかに俺は橘だ。とゆうかこれ着てくれ清水さん、目のやり場に困る」

確かによく見れば昨日助けた少女だった。

自分の学ランを渡す。

「ありがとう、橘君」

「別にたいしたことは何もしてないそして『誰かを助けるのに理由なんて必要ない』」

俺の幼馴染がよく口にしていた座右の銘。

「そ、その言葉は？」

「俺の親友…いや今は俺にはそんな事言えないな、幼馴染が口にしてた座右の銘だけだ？」

「そ、そう。ところで橘君、私人探ししてるんだけどさ峰元薫って

名前の人って知ってる？陸上が上手いんだけど」

「……峰元は俺の旧姓だ。でも多分あんたの探している人じゃない。俺からあんたにひとつ聞いていいか？」

「何？」

「どこか、近くの中学が自分のいた中学で帆伽綾ってゆう子知らないか？」

こいつがアイツ、綾の名前を知っているのは軌跡に程近いかもしれない。

俺はその可能性を試した。

直後、清水に抱きつかれた。

多分、要以外の同じ年の異性に抱きつかれたのは初めてだと思う。

「うっ、うあああ」

突如、泣かれてしまった。

「あ、の…清水さん？」

「本物の薫だ、会いたかった、また会えた……」

…多分まさかだ。

取り合えず、確認をとる。

「ほと…や…？」

昔アイツが女々しいから自分の名前がイヤだと言っていたから俺がつけたあだ名。

それを言ってみる。

「うんっ。僕だよ、薫」

彼女、清水綾が顔を上げるとその笑顔がほとやと重なった。

不意に、俺も涙が出てくる。

「やっと会えた、やっと言える。後悔しまくったあの後ずっと言いたかった。清水いや、ほとや聞いてくれるか、4年越しの言葉だけ」

「うん。薫」

俺は4年と言う短いようで長い時間、ずっと言いたかった言葉。

「ほとや、……」

3話（後書き）

早くも主人公と幼馴染の再会。

この後の展開を考えるのが辛そうだ。

（苦笑い）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2316ba/>

こんな俺にしかできないこと

2012年1月6日23時45分発行